
世界に触れながら

モヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に触れながら

【Nコード】

N0489Z

【作者名】

モヨ

【あらすじ】

初心者の私が詠む短歌集です。

季節の移り変わり

見えたもの

気付いた事

抱いた気持ち

世界に心が触れた瞬間を、三十一文字の短歌に込めました。

詠んで景色や心情がリアルに蘇るような歌が詠めたらいいと思います。

1・2010年、秋の歌

『雨降れる 朝の駅舎の 蒸し暑さ 愛し人より 秋ぞ恋しき』

九月七日は朝から細かい霧雨がふっていて、駅について立ち止まると一層蒸し暑さを感じました。なかなか残暑は去ってくれません。好きな人よりも、今この瞬間は涼しい秋が恋しい！
あの日は、それくらい不快指数の高い朝でした。

『家を出て 歩く小川の 散歩道 懐かしく思う 昨日の暑さ』

九月の中頃、ふと気付く季節の移り変わり。
あれほど辛く鬱陶しかった暑さも過ぎればただただ懐かしいものです。

『窓のそば 感じる空気の 冷たさは 心安らぐ 恋しい秋かな』

夏、ギラギラと太陽の照りつける南向きの窓は、決して居心地の良い場所ではありません。

そんな窓ガラスの向こうから、ある日ひんやりとした空気が微かに流れてきて、

いよいよ私の大好きな季節が来たのかとワクワクした秋の朝でした。

『冷房は 消えて静かな 電車にて 涼しく秋を 感じる夕暮れ』

電車でふと妙な違和感に気付きました。車内がとても静かなんです。人の小さな話し声がよく響くので、私は冷房の音が消えた事に気付きました。

確かにその日の夕方は気持ちいい秋風が吹いていました。

2・2010年、恋の歌

『あなたへの 気持ちは絶えぬ ままなのに あなたの便りは 絶えて久しく』

三年間、片思いをしていた人がいました。
去年彼は東京に行ってしまい、疎遠になって、ついにはメールも来なくなりますが
それでも私の気持ちは絶えてくれません。

『地を覆う 草の根よりも 深くある 私の恋は 苦しくも枯れず』

広い範囲に深く根を早す雑草つてあるじゃないですか。
あれを抜くのって、すごい力があるんです。

ついにはカマでほじくり出すんですが、私の恋も雑草のようでした。
周りに「もう諦めなよ」と言われても諦められず、深く深く根をはって

微動だにできなかったあの頃です。

『追いつかない　あなたが生きた歳月と　埋まらない距離に　途方にくれる』

実はその片思いの相手がすごい年上の方でした。
ジェネレーションギャップなんて関係ない！と、普段は強がっていましたが、
やはり一緒にいると悔しい瞬間があっただんですね。

『駅で見た　あなたの帽子　山吹色　声もかけられず　弱い私は』

ついに告白して、見事玉砕。

その数週間後に電車で彼を見かけました。
でも声もかけられずに気づかないフリをしてしまいました。
私をつった時「普段通りでいたい」と言ってくれたのは彼の方だったのに、

弱虫な私は友人にしこたま叱られてしまいました。

3・2010年、雑の歌

『別れてや それぞれの明日へ 向かう友 幸せであれと 願ってはやまずに』

友人で集まってそれぞれの悩み事を語り合ったあと、

「バイバイ」と各々の帰路につく私達。

みんな違う道だけど、みんな幸せになればいいなと願っています。

『秋の夜の 愁いがつのる 静けさを 打ちて壊さん 二人の漫才』

芸人さんが大好きです。

一人寂しい秋の夜に、賑やかな漫才は最高の特効薬。

二人の掛け合いを夢中で追ってる間は、悩み事なんて忘れていきますから。

『輝いて いずれ光は 朽ちるとも 思い出だけは 朽ちず絶えな
ん』

いつか光が消えるように、もし栄光の舞台から降りるときがきても
輝いていた過去はずっと消えずにそこにある。
あつて欲しい…そんな願望もこめています。

『夜もふけて 笑い声ひびく 有楽町 猥談もみな 月に消えゆく』

これはオールナイトニッポンを聞きながら詠みました。
ニッポン放送のある有楽町で繰り広げられるシモネタ（笑）
他愛もない話だからこそ、瞬間的に面白く日本中に広がって、
朝には月が消えるように、私の心からも薄れていくのです。

『わるばやし まもりばやしに おきばやし わかちゃんぴんと
ぴんくのかすみん』

オードリーのオールナイトニッポンを聞いてる方なら分かるかと…。

4・2010年、冬の歌

『秋雨に 散るは黄金の 金木犀 香りは消えて 寒さが満ちる』

冷たい雨のあと、落ちた金木犀の花で道がオレンジ色に染まります。ただあの甘い香りはなく、変わりに寒い冬の空気が満ちていくのです。

『イブの日は 一人気ままな 自由な日 わずかに寂しさ 心をたたく』

一人で過ごすことが決定したクリスマスイブ。

こうなったら好きな物食べて、好きなテレビ見て、とことん自由に過ごそう！

そう決めていた私ですが、やはりふとした時に寂しさが心をノックしてきます。

『師走の日 慌ただしさに 追われては 空の色さえ 記憶にあらず』

年末の日々は忙しすぎて、昨日が曇りだったか晴れだったか、それすら思い出せなかった12月のある日でした。

『朝日さす 凜と冷たい 冬の朝 新たな年を 待ち焦がれてる』

大晦日に詠んだ歌です。
故郷は雪深い街なので、一人暮らしのアパートよりもっと寒くて…
そんな2010年最後の朝に、新年の訪れに心を弾ませました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0489z/>

世界に触れながら

2011年12月1日22時45分発行